

1. 教育・学習に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	学習成果の達成につながるよう各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な授業形態、方法をとっているか。また、学生が学習を意欲的かつ効果的に進めるための指導や支援を十分に行っているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいるか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	総合情報学科では、学科全体・情報システム学系・データサイエンス学系・情報メディア学系及び教職課程の各カリキュラム・ポリシーに従って授業科目を開講している。なお、令和5年度の改組により、充実した教育課程の編成を進行している。 教育課程の内容としては、学科共通の科目として、教育理念「現代実学主義」の基礎となる科目区分「現代実学」を割り当て、「情報リテラシー演習」、「情報社会とAI」の2科目を配し、学部学生全員が履修する必修科目としている。3つの学系に対してはそれぞれ、情報システム学概論、データサイエンス概論、情報メディア概論を必修とし、各学系における学びの方向性を学生に示し、また、続く専門教育への入り口としている。学生ハンドブックには学系ごとの履修モデルを明示し、学生が所属した学系に適している授業科目を履修できるようにしている。また、学位授与方針に関連付けたカリキュラムマップを作成し、シラバスの到達目標に、学位授与方針に関連付けて、どのような知識・能力を修得できるかを具体的に明示している。専門教育については、「専門基礎」、「専門応用」の2つの分類の下に各学系の特色を反映できる科目を用意している。	令和4年度から対面授業に戻ったが、従前からの授業形態に加え、リモート授業で培ったICTを用いた学習支援の学習効果を検証しながら、使用する教材や外部講師を招請した講演などでzoomを導入した授業を部分導入した。また、その機能を用いて復習のための授業録画ビデオの公開、さらにはWebで学習を支援するためのWebClassなどのLMS(Learning Management System)を利用するなど、授業の有効な補足手段として活用している。こうした取り組みを通して、学生が学習を意欲的かつ効果的に進めるための指導・支援の体制構築にあたっている。 また、従来からの東京情報大学Web情報システム「J-port」サービスでは学生への連絡や学生からの各種申請や登録ができるようになっている。 総合情報学部では、4月上旬に1年生を対象に英語、数学、国語の基礎学力調査を行い、「英語」「文章表現」「数学系科目」の能力別クラス割り当てを実施している。特に、成績上位の学生はアドバンストクラス、成績下位の学生はベーシッククラスへ割り当てて、能力に合った徹底的な指導を行っている。 また、初年次教育として、1年次生全	成績評価については、評価方法をシラバスに明記し、それに基づいて厳密に行っている。シラバスは東京情報大学Web情報システム「J-port」上に記載されており、ネットワーク環境があれば学生はどこからでも参照可能となっている。また進級要件・卒業要件については、総合情報学部履修規程第19条及び20条に規定し、学生ハンドブックへ掲載するとともに、J-portからは現在の取得単位数や進級・卒業に必要な単位数などを確認することもできる。 2年次から3年次への進級では、入学後の2年間(休学期間を除く)で、修得単位が50単位に満たない者は、3年次に進級することができない。3年次から4年次への進級では、3年次終了の時点で、①修得単位が90単位以上であること、②1年次配当の必修科目の単位を全て修得済であることが求められる。 一方、未然に成績不良を防止するためにJ-portの出席管理システムを利用している授業科目において、出席を殆どしていない学生の確認を行っている。令和4年度から導入されたJ-portの出席管理システムでは、全ての教員が全ての学生の出席を確認することができる	各授業のシラバスにディプロマ・ポリシーに関連付けた到達目標(「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考」)を明記し、目標に到達しない場合は単位を付与しないことを学生に周知している。 本学の学びの集大成として全学生に必修科目として「卒業研究」を課している。「卒業研究」については従来、研究室単位での評価であったが、令和2年度より学科共通の評価表を策定し、令和5年度よりルーブリック評価を導入して審査し、学位授与を行っている。 また、令和3年度より「卒業研究Ⅱ」において卒業論文評価基準(ルーブリック)に基づく成績評価を導入している。本導入により、評価基準の客観性確保だけでなく、卒業論文作成における目標設定や指導にも役立てている。 さらに、卒業研究に関しては卒業研究の授業の一環として、毎年各研究室代表者による卒業論文発表会を実施している。 なお、令和6年度の卒業論文発表会においては17件(発表者ベースで19名)の登壇による発表があった。今回の卒業論文発表会を通して、特に優れた卒業研究であると評価された6件の発表者には学長賞または小田賞が授与された。	学生にとって一段と魅力ある学科とするために、令和元年度に「大学院及び総合情報学部次期改革委員会」を設け、学部(学科)の教育体系の構成について検討を行った。検討課題として、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度への対応と新分野(生命情報分野、IoT分野)への展開も考慮され、結果として、令和5年度より新たに「情報システム学系」、「データサイエンス学系」、「情報メディア学系」の3つの系列を柱とした体制を開始した。それに伴い、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの見直しと教育編成の整合性を検討するとともに教育体系化を検討し、改定を進めてきた。 「大学院及び総合情報学部次期改革委員会」の成果に基づき、現在、「総合情報学部将来構想検討委員会」を立ち上げた上で、社会状況の変化なども考慮に入れつつ、引き続き教育体系の構成等について検討を行っている。 また、研究室単位で教育課程の改善点をボトムアップから把握するためのレポートライン(学科内に研究室取り纏め役の設置)を学科内に整備した。 なお、教職課程においては既に質向上を目指した自己点検・評価の取り組みを行っており、令和4年度において一般社団法人

	学生の社会的及び職業的自立を図るために、科目区分「キャリアデザイン」を割り当て、キャリア形成を支援する科目を配し、就職支援行事と合わせて複合的に学生のキャリアアップを図っている。	員を対象とした必修科目「基礎演習」を配当している。この授業は、①本学の教育理念等を理解する、②目標に沿った履修計画をたてる、③大学での学び方を理解する、④大学の特色・特徴のある設備や学びの概要を知る、⑤読む、書く、聞く、話すことができるなどの指導を行っている。また、授業に限らず大学生活の指導なども行っている。 主体的学びを促す必修講義科目として「知識創造の方法」を１年前期に配当している。当該科目は、クラスごとに科目担当者の設定した内容を題材にアクティブ・ラーニング形式の授業を展開している。 ２年次後期より専門教育を行っており「専門演習」、「卒業研究Ⅰ/Ⅱ」が必修となっておりゼミナール形式の教育活動を行っている。	ため、より細かい指導が可能になっている。また出席の少ない学生に対して、個々の担当教員の見落としを防止するため、必修科目の欠席者の一覧を全教員に報告し、担当教員が学生の指導を行う体制を取っている。複数回欠席が続く場合は担当教員に連絡し、学生の指導を行う体制となっている。 進級・卒業要件を満たさなかった学生には、学期末にクラス担任が保護者を交えた面談を実施し指導している。また、１年次生には進級要件を設けていないが、修得単位数が２０単位に満たない者に対して、同様に指導を行っている。１～３年生については、当該年度のGPAが１.０未満の場合、年度末にクラス（ゼミ）担任による面談指導を行っている。	また、令和５年度から卒業論文発表会へのさらなるエントリーを促すために、学長賞または小田賞に準ずる賞として学科長賞を設けた。学長賞または小田賞の受賞には至らなかったものの、これらに準ずる卒業研究を行った学生に対してその成果を顕彰した。	全国私立大学教職課程協会から認証を受けている。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 教育課程は学位授与方針、教育課程編成の方針に基づき適切に編成している。特に専門教育においては学系毎に「専門基礎」、「専門応用」の２種類の科目群を設定し、各学系において学系を特徴づける専門能力を高めるための授業科目が用意されている。	【長所】 基礎教育では、「英語」、「数学」、「文章表現」は能力別クラスを設けたきめ細やかな対応をしている。学科全学生を対象にした選択必修科目としてアクティブ・ラーニングである「知識創造の方法」を設置し特色ある教育を実現している。また、２年次後期よりゼミナール形式の専門教育を行っており、より高い専門能力の獲得に向けた教育活動を実現している。	【長所】 進級・卒業判定は適切に運用している。なお、その進級・卒業要件の適切性については、各年次で３０～４０単位を修得すれば要件を満たすので、必ずしも厳しい要件であるとは言えない。	【長所】 本学科のディプロマ・ポリシーは「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考」に内容を細分化しその方針を詳細に明示している。 ディプロマ・ポリシーの達成を確認するために「卒業研究」を必修として課し、大学での学びの成果を卒業論文としてまとめさせている。	【長所】 「大学院及び総合情報学部次期改革委員会」を設け、学部（学科）の教育体系の構成について検討を行った。 教職課程においても、恒常的に質向上を目指した自己点検・評価の取り組みを行っている。
	【特色】 基礎教育においては、「全学基礎科目」「共通基礎科目」「情報基礎科目」、「キャリアデザイン科目」が設定されており、専門教育には「専門基礎」、「専門応用」、「卒業研究」を設置し、段階的に専門能力を修得できるよう工夫している。各学系の履修モデルに従って学習する	【特色】 基礎科目では、能力別クラスをもった講義科目を設置し、あわせて、主体的学びを促す講義科目として「知識創造の方法」をアクティブ・ラーニング形式で授業を実施している。 専門教育では段階的な専門的教育を学ぶと同時に２年次後半よりゼミナール	【特色】 学生自身で確認できる Web での進級・卒業判定を４年次になってからでなく、２年次から可能とし、早い段階で不足している卒業要件単位数を把握できる。	【特色】 各授業のシラバスにディプロマ・ポリシーに関連付けた到達目標（「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考」）を明記し、学生に周知している。 ディプロマ・ポリシーの達成を確認するため卒業論文に対して学科共通のル	【特色】 教育体系の点検を行い令和５年度の学部学科改組を完了した。教職課程においては、質向上を目指した自己点検・評価の取り組みを行った結果、一般社団法人全国私立大学教職課程協会から令和２～３年にかけて好事例校に選定された。

	ことにより、それぞれの専門知識を身に付けることができる。	ル形式の教育を行うことにより、より高い専門能力の獲得に向けた教育活動を実現している。		ーブリック評価を実施している。学系毎に卒業論文の発表会を開催し、4年次生だけでなく、教育の一環として1年次生にも参加させている。	
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 各学系の履修モデルは用意しているが、教育課程の体系を示す履修系統図を用意しておらず、授業科目の学修段階や順序等の体系性を明示できていない点が問題である。 学系振り分け後に生じる専門分野の変更やスキルの乖離が起きることで、2年次以降に学系変更の変更を求める学生が散見されるなどの問題がある。	【問題点】 学生の授業外の学習時間が十分に確保できていない科目がある。 3学系への割り振りを早期に実施しているが、一方でその後の履修を進める過程で、研究分野の変更等を生じた学生が学系転換を希望するケースへの配慮が不足している。	【問題点】 複数回欠席が続く場合において、担当教員に連絡し、学生の指導を行う体制となっているが、長期欠席者の中には、家族のトラブル、健康の問題、そして家計の生活困窮などを抱える学生も多く、その対応に専門的な対処が必要となっている。つまり、教員の介入度合いが深まるにつれて、逆にトラブル発生のリスクが高まっている実情がある。	【問題点】 卒業論文の評価にルーブリック評価の導入により評価基準の細分化や明確化は改善されたが、評価の妥当性を検証する余地は残されている。	【問題点】 大学運営全般に係わる会議体として運営委員会があるが、学部学科の長期的構想について、恒常的に検討する機会/手段が必要である。そのために、研究室からの意見を学系会議等の場で集約し、学科会等で調整した上で教授会に反映する方法を考えていきたい。 教育課程及びその内容、方法の点検・評価を研究室単位で恒常的に汲み上げる機能が不足している点が問題である。
	【課題】 学生がレベルや専門を勘案して授業科目を履修できるよう、学期開始時のガイダンス、及び基礎演習に加えて、授業科目を適切に分類した上で学修の段階や順序等を表し、教育課程の体系性を明示する仕組みの導入が必要である。 社会や学術環境の変化に応じて、3学系内の研究室編成や教員配置を機動的に見直す必要がある。	【課題】 卒業研究や演習系の授業については、授業外の学習を担保できるが講義科目については、それが十分ではない。講義科目においても課題を課すなど、授業外の学習時間を確保する必要がある。	【課題】 春、秋それぞれの学期開始時のガイダンス及び基礎演習において、卒業要件について、成績表と卒業要件を的確に見比べながら履修指導を徹底し、また履修モデルを活用のうえ指導する必要がある。	【課題】 学科、学系を通して卒業論文のルーブリック評価の実績に鑑み、次年度の評価に向けた体制整備を進める必要がある。今後、教務委員会にて議論された内容を学科で具体的に展開して行く必要がある。	【課題】 学部学科の長期的構想について、令和3年度「総合情報学部将来構想委員会」を設置し、トップダウンで長期的構想を検討する体制は確立された一方で、研究室単位でボトムアップにより意見集約する体制を整備したが、その機能は十分に発揮されていない。
根拠資料名	・学生ハンドブック 2024	・学生ハンドブック 2024 ・J-port	・学生ハンドブック 2024 ・J-port	・学生ハンドブック 2024 ・J-port	・大学院及び総合情報学部次期改革委員会議事録 ・総合情報学部将来構想検討委員会議事録 ・総合情報学部教授会議事録 ・学生ハンドブック 2024 ・一般社団法人全国私立大学教職課程協会教職課程質保証に関する特別委員会編 令和2年度文部科学省委託事業 「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」運営の責任体制と自己点検・評価を核とした教職課程質保証評価に関する研究報告書、令和3（2021）年3月22日 ・一般社団法人全国私立大学教職課程協会 『教師教育研究』、第34号（2022年

					3 月刊行予定), 自己点検評価の特集号 ・関東私立大学教職課程協会 会報 91 号 (2022 年 5 月刊行予定), 2021 年度第 2 回研究懇話会のシンポジウム講演
--	--	--	--	--	--

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学生募集及び入学者選抜に関しては、本学のアドミッション・ポリシーに鑑み、学生募集の計画、学部紹介パンフレットの作成・ホームページを使用した広報、学生募集行事（オープンキャンパス等）、入学試験をそれぞれ実施している。	現在、学生の受け入れについては、入学試験を「総合型選抜（未来創造型）」、「総合型選抜」、「学校推薦型選抜（公募制推薦）」、「学校推薦型選抜（指定校推薦）」、「帰国生選抜」、「一般選抜」、「共通テスト利用選抜」、「外国人留学生選抜」の主に8種類で実施している。これらによる学生の受け入れについては、毎年、入試・広報委員会、運営委員会、教授会で機関決定されている。令和元年より、ディプロマ・ポリシーをさらに反映するべく一般入学試験（Ⅰ期／Ⅱ期）を3時限制に変更し、今年度も同様の形態で入学試験を実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・毎年、年度当初にオープンキャンパスの年間計画を全教員に提示のうえ学生募集に対応している。 ・一般試験については、本学独自の「監督実施要領」を作成し、公平な入学者選抜を行っている。	【長所】 ・毎年、入試・広報委員会、運営委員会、教授会など複数の機関での議論をとおして学生の受け入れが決定されている。 ・多様な入学試験を実施することで、様々な可能性を持った学生を選抜している。また、一般入学試験（Ⅰ期／Ⅱ期）を3時限制の下、選択科目を幅広く設け、広く学生の受け入れを行っている。また、英語については、外部検定試験を見なし得点に換算する制度を設けている。 ・多様な入試形態で学生を受け入れていることで、総合情報学という学際領域を学びたいという受験生を幅広く受け入れることできる。
	【特色】 ・全教員が一般試験の説明会に参加し、入試の実施について共通の理解をしている。 ・コロナ禍では申込み制による来場者を制限するなど制約の多いオープンキャンパスであったが、令和5年度からは学系別の個別相談を全面的に復活させるなど受験生に対してきめ細かく対応している。	【特色】 ・複数の機関決定をもって学生の受け入れ体制を決定している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・昨今の受験生の応募状況を考慮しつつ、学生の受け入れ方針に基づく入学者選抜の作業（例えば指定校推薦での入学者比率の判断など）が難しくなっている点が問題である。 ・令和5年度からはオープンキャンパスの模擬授業を通して本学の特色をアピールすることが可能となったものの、データサイエンス学系を受験生にPRするためのコンテンツが不足している。	【問題点】 ・定期的な点検制度の方法に大きな問題はないが、近年、学力の高い受験生が増加、または減少するなど入試を取り巻く状況は年々変化していることから、学生の受け入れの適切性を連続的に評価することは難しくなっている。 ・コロナ禍後に増えつつある外国人の受験生に対して、受入れ後の点検・評価の体制づくりが追い付いていない。
	【課題】 ・近年、変動する受験者の学力水準を反映し、学科・学系を中心とした総合的な検討が必要である。入学者の選抜については、総合型選抜や推薦入試の課題、一般試験の入学試験問題について今年度の入試結果を踏まえて調整する必要がある。 ・各学系の新たな魅力を発信できるよう工夫し、オープンキャンパスの実施体制を含め学生募集の	【課題】 ・入試制度の大規模な変更は、受験生への配慮から2年前の告知が必要であり、1年次の4月上旬に1年生を対象に実施される英語、数学、国語の基礎学力調査の結果を活用しながら、かつ進学状況の適格な予測に基づき、点検・評価する必要がある。

	体制を一段と強化する必要がある（特に、データサイエンス学系における学びの魅力を受験生にアピールすることは難しいため、データサイエンス学系のPR戦略は喫緊の課題である）。	
根拠資料名	・学部紹介パンフレット ・大学ホームページ	・入試広報委員会議事録 ・運営委員会議事要旨 ・総合情報学部教授会議事要旨 ・学部紹介パンフレット ・大学ホームページ ・第13回東京情報大学総合情報学部将来構想検討委員会資料

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③
点検項目	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげているか。	教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげているか。	教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいるか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	総合情報学科では令和5年度からの新体制で、それぞれの教員の専門分野に従って、情報システム学系内に3研究室、エータサイエンス学系内に3研究室、情報メディア学系内に3研究室を設け、それぞれの研究室内で協力し合って研究・教育を行う体制を取っている。	ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を実施している。教員の質的向上に対しては、各学期に授業ごとの「授業評価アンケート」を実施している。 例年、FD委員会で検討したテーマについて、教員の質の向上に向けた講演会を開催している。	学科・学系の教育体系、科目構成に対応した昇格、採用等の人事を行っている。また、毎年教員に個人調書を提出してもらい、研究業績や研究・教育活動の実績を点検/確認している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科の中に3つの学系を置くことにより教育体系を整理及び教育研究の体制を編成している。	【長所】 ・授業評価アンケートの結果について、当該科目のコメントを全教員に課し、学生への回答としている。	【長所】 ・毎年、個人調書の提出後、各学系長が、研究業績等を確認している。
	【特色】 ・学系制を編成することにより、専門的な教育を提供するとともに教員の研究体制を実現している。	【特色】 ・定期的に授業評価アンケートを実施し、併せて、FD委員会主催による、教員の質の向上に向けた講演会を開催している。	【特色】 ・提出された個人調書、業績書に基づき各学系で教員組織を視野に入れた昇格人事が、毎年、検討されている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・適切な教員組織の編成を適切に行うために、研究室単位の意見をボトムアップで集約する機能が不足している点が問題である。	【問題点】 ・例年FD委員会で開催を検討しているが、テーマ設定の長期目標が定められていない点が問題である。	【問題点】 ・研究室単位で教員配置を点検できていない点が問題である。 ・研究分野においては、業績評価の中心が査読付論文の本数だけで評価できないなどの硬直的な昇格評価が問題である。 ・定期的な教員組織の検討を行っているが、教員組織の経年変化に対応できる昇格ができていない。
	【課題】 ・学系の各カリキュラム・ポリシーに沿った上で、社会や学術環境の変化に応じて、教員組織の編制方針を研究室単位で再編成する必要がある。	【課題】 ・変化する社会状況や学内事情に鑑み、長期的な視点でFD改善に向けた計画を検討する段階にある。	【課題】 ・適切な教員や研究室の配置に関する状況分析を研究室単位で収集しながら点検する必要がある。 ・昇格の妨げになっている過度な業績数の基準に柔軟性をもたせる必要がある。

根拠資料名	・ 学生ハンドブック 2 0 2 4 ・ 第 324 回東京情報大学運営委員会資料 2	・ 総合情報学部教授会議事録	・ 教員個人調書
-------	---	--	--